
聖夜の出会い

幸守舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の出会い

【Nコード】

N7003Z

【作者名】

幸守舞

【あらすじ】

始めて彼と過ごすイヴ。楽しみにしていたはずなのに、早くに着いてしまった待ち合わせ場所で見たのは、彼のキスシーン。

問い詰める事もできずに逃げ出した末に辿り着いた公園は、恋人たちで溢れ返っていて――。

「そんなに溜め息ばかり吐いてると幸せ、逃げちゃうよ?」

突き付けられた現実に幾度となく溜め息を吐く私の耳を優しく甘い声が叩いた。

幸せー溜め息〓出会い？

「はぁ……」

白く染まつた溜め息が足の間に虚しく落ちた。今日で何度目の溜め息だろうか……ふと思ったが、考えるのも、数えるのも、馬鹿らしいほど私は溜め息を零していた。

「はぁ……」

ほら、また一つ。

今日はクリスマスイブなのに私は一人で公園のベンチに座っている。周りを見回せば……。

「はぁ……」

溜め息を吐きなくなる光景で溢れ返っている。

（何で、こうなっちゃったんだろう……）

本当は私だって一人じゃなかった。

——今さっきまでは。

思い出すだけで涙が出そうになる。

「はぁ……」

震える目蓋をぎゅっと閉じて溜め息と一緒に涙を止めた。

（あんな人の為に、私が泣く必要なんて、ない）

それでも溢れてくるのは、待ち合わせをしていた彼が、他の女とキスをしているところ。彼は、私に気付いていない様子だった。でも私は――。

何も知らないフリをすれば良かったのか、彼を問いただせば良かったのか……。結局どちらも出来なくて、私は待ち合わせ場所から逃げるように立ち去った。

「はあ……」

さつきからずっと彼からの電話で携帯が震えている。私はそれを鞆の中に押し込んで見ないフリ、聞かないフリ。きつと別れる事になるだろう。待ち合わせをすっぱかし、電話にも出ない、そんな女と付き合い続けてくれるわけがない。

（――それにあんな人、こっちから願い下げよっ）

そう、胸中で呟いてみても、心に広がる黒い靄は一向に晴てくれない。

付き合い始めてまだ三ヶ月も満たないというのに、私の心はすっかり彼に奪われていたのだ。だからあんなシーンを見ても尚、私は彼への怒りを表せずにした。

（私って、どうしようもないみたい……）

何も知らないフリをして付き合い合っていけるほど、器用じゃないのは自分が一番わかってる。なのに――。

（私は、彼を諦められないでいる……）

せめて鞆の中で震えている携帯に出て一言“さよなら”と、告げる勇気があればどれだけよかっただろう。

「はぁ……」

「そんなに溜め息ばかり吐いてると幸せ、逃げちゃうよ?」

「——え?」

突然、本日幾度目かわからない溜め息を零した私の耳を優しく甘い声が叩いた。はっとして顔上げると、ふわふわと笑った青年の瞳とぶつかり——

「——っ!」

刹那、ドキリと胸が高鳴る音がはっきりと聞こえてしまった。

「し、幸せが逃げるって、そんなの迷信みたいなものでしょ?」

私は胸の高鳴りを誤魔化すように早口に捲し立てた。

「そんな事ないって、俺は思っただけだなぁ……」

悲しそうに喋る彼に私は聞きたくなってしまった。

「……溜め息で幸せ逃げた経験あるの?」

「うん——。実はさ、彼女が待ち合わせ時間をよく破る人で、今日も遅刻してたんだ。あんまり遅いんで溜め息吐いたんだよ。またか、って。そしたら、溜め息を吐いた先に彼女が居たんだ。知らない男

とキスしてた——」

私は凄く驚いていた。彼の話が自分と重なっていたから——。

「君も、そうだったりする？」

彼の言葉に私は息を飲んだ。

そんな私を余所に彼は話続ける。

「あの時、彼女に何してんだっ！ て言おうとしたら、君が真つ青な顔して俺の前を走って行くから気になって追っ掛けて来たんだ。——もしかしたら、って思っで。でも普通“もしかしたら”ってだけで追っ掛けた上に話し掛けたりしないよね、今更だけど……」

そう彼は後ろ手に髪を触りながら照れ臭そうに言った。

私は呆気にとられて彼の顔をまじまじ見つめてしまう。

——確かに、目の前の青年が言うように“もしかしたら”で見ず知らずの自分を追って来たなんて馬鹿げてる。

でも——、今の私には寧ろ有り難かった。

「もしかしたら」じゃなくて、その通りなんだけどね……」

私は少しでも気を紛らわせたくて、彼と色んな事を話した。

彼氏の浮気癖の事、わがままな人だという事、変な仕草を格好良いと思ってる事、ナルシスト気味である事…… e c t、e c t、e c t。

それから、彼の彼女の事を聞いた。

時間にルーズな事、化粧が濃い事、無闇に体をくっつけてくるのが実は鬱陶しい事、他の男に色々貢がせている事…… e c t、e c t、e c t。

『……………ぶっ！』

日頃の鬱憤を吐き出すように話し合えば、無性に可笑しくなって私と彼は同時に吹き出した。

ひとしきり笑った後、目尻に溜まった涙を拭う。

「お互い、何で付き合ってるんだろうね……………」

「……………確かに」

私達は再び顔を見合わせて笑った。

しばらくして笑いを収めた私は、座っていたベンチから立ち上がった。軽くお尻を叩き「んっ」と伸びをする。

「話、聞いてくれてありがとう。何だかスッキリした」

私は同じく立ち上がっていた彼に笑顔を向ければ、柔らかい笑顔を返される。だけど直ぐその笑顔は消え、なんとも言えない微妙な表情^お情^かに変わる。

「えーっと……………君はこれからどうするの？」

先程までと違う彼の様子に（ん？）と内心、首を傾げつつも答える。

「帰ろうかなって思ってたけど……………」

二人で過ごすつもりでいたのに、今更一人で街を歩くななんて惨めだ。

そう告げれば彼は少しだけ視線を宙に彷徨わせ、引き結んでいた唇を開く。

「……あのさ、よかったら……その、今日一日、一緒に回らない？」

私は言われた事に驚いて、じっと彼を見詰めてしまった。

「会ったばかりで、こんな事言うのもアレなんだけど……。なんて言うか、悲しい思いをしたもの同士と言うか……」

私が向けた視線の所為か、焦ったように言い繕う彼の姿がおかしくて、くすりと収まっていた笑いが再び零れ出す。

「私——千紗、浅海千紗。今日一日、よろしくお願いします！」

だから私は了承を示す言葉を彼に返す。いつもの自分ではあり得ないほど大胆だ、と思いながら。

「あつ、俺は修一、葛城修一。こちらこそよろしく！」

電信柱＋物思い〃ゆでダコ

「それではどこに行きたいところがありますか？ お姫様？」

公園を出ると彼は先程とは打って変わった恭しい態度でそんな事を言うので、私は口元に笑みが浮かぶのを止められなかった。

「私の行きたいところかぁ……。うーん……。よしっ！」

そう言っただけ顔を上げると、ふわふわと笑ってこちらを眺めている彼の瞳とぶつかり治まりかけてた胸の鼓動が再びドキリと大きく鳴った。

その胸の鼓動に後押しされるように私は早口かつ叫ぶように言い切った。

「えっと、あのね、私、あんまりこの辺のこと知らないの。だから、その、修一くんにお任せするっ！」

ちよつとあたふたしてた私に彼はオーケーと笑って先に歩き出した。私はその背中をぼんやり眺めながら思う。

（私、どうしちゃったのかなぁ……）

何でこんなに苦しいのだろう？

出会ってまだ数分しか経っていないのに……。

——ゴツッ！

「痛っ！？ な、何！？」

「大丈夫？ 千紗？」

慌てふためく私の鼻を甘い香りがくすぐった。
そして気が付くと数センチ先に私の顔を覗き込む彼のやわらかい
瞳が――。

「――っ！！」

私は声の無い悲鳴を上げた。

「ははっ。千紗って可愛いね」

彼の吐息が前髪を揺らしてそつと離れた。

私はおでこを片手で押さえつつ目の前の電信柱を蹴り付けた。
そつ、私は間抜けにも考え事に夢中になって電信柱にぶつかった
のだ。

（穴があつたら入りたいっ！）

今ならゆでダコにも勝てる。そんなくだらない事を本気で考えな
がら、私は熱く火照った顔を俯かせた。

「ねえ、千紗。……手、繋ごうか」

「え……？ ……ええ！？」

その唐突な物言いに私は弾かれるように顔を上げ、そのまま照れ
臭そつに片手を差し出している彼を茫然と眺めた。

「そんなに驚かなくても……」

彼は差し出している手と反対の手で頭を掻きながら続けた。

「だって千紗、ほつといたら色んな所にぶつかりそうだから」

「それは――」

手を繋ごう発言でどこかに飛んでいったはずのゆでダコが再び顔に舞い戻ったのを感じながら、私は何か言わなくてはと必死になった。

「ははっ。やっぱり千紗って可愛いね」

そう言いながら彼は私の手を優しく、けれど強く掴み、そして引いた。

「きゃ!？」

その強さに思わずよろめき私は小さな悲鳴と共に彼の腕の中に倒れこんだ。

そして、そんな私の耳元で彼は低く囁く。

「どうせぶつかるなら俺にしてよ」

はい。と素直に答えたいくなるような甘い囁きだった。

「じゃあ、行こうか」

彼は何事も無かったかのように私を腕の中から解放すると歩き出

した。もちろん、その手は握ったままで。

「後さ“くん”とか付けなくていいよ、俺の名前。……似合わないし」

私の手を引き先を歩く彼の表情は見えないけれど、空いている片手は頭を掻いていて、それは彼が照れている時の仕草なのだと唐突に気が付いた。

だから私は彼の顔を見てやろうと小走りに彼の前に回り込んだ。

「ぶ、あははっ」

私よりほんの少し高い位置にある彼の表情に思わず吹き出ししまった。

「顔、真っ赤！」

私のゆでダコよりもきつと赤いに違いない。そんな事がたまらなく嬉しくて私は彼の手をぎゅっと握り締めた。

彼は顔を赤らめたまま視線を明後日の方に逃しているが、私の手はしっかりと握り返してくれた。

（幸せってこんな感じなのかな……）

そう思えるほど私は満ち足りた気分だった。

「着いたよ」

彼の一声ではっと我に返った私は目の前に広がる光景に息を呑んだ。

これは――。

「ゲーセン……?」

「そうだよ」

彼はのんびりと私の疑問を肯定してくれた。

「なんで――ゲーセン?」

せっかくロマンチックな気分浸ってたのに、これじゃ台無しじゃないのっ!? 等とぶつぶつ呟く私を気にする素振りさえ見せず彼は私の手を引いてずんずん入っていた。

「ふふふ、いいわ。こうなったら……」

私の怪しい呟きは、ゲームセンターに流れる大音量の音楽に攪かわはれて彼の耳に届く事はなかった。

鳴り止まない電話+ゲーム〃？吐き

——数時間後。

「ま、負けた……」

「ふふん」

彼の幾度目かの呟きに私は鼻で笑い返す。

「千紗強すぎ」

ガツクリと肩を落としてうなだれている彼の様子があんまりおかしくて、私はつい笑ってしまった。

「そんなに笑わなくなつたつて」

「あははっ。ごめん、なさい。ちよつ、無理」

その不機嫌な声がよりおかしくて。当分笑いは治まらなさそうだと目に涙を浮かべながら思った。

「大体、千紗の苦手なゲームとかあんの？」

ちよつと逆ギレ気味の彼の問いに、私は笑いをなんとか押さえて答える。

「あるわよう。ほら、えーっと……、アレアレっ！ クレーンゲーム。あれだけはどうしてもダメなの。何度やっても取れないの」

不思議よねー？　そう言って私はゲームセンターの入り口付近に鎮座するクレーンゲームを指差しながら首を傾げた。

「それホント？　俺、結構得意だよアレ。ああ、そうだ。ちょっと待ってて」

そう言うや彼はクレーンゲームと格闘を始めた。そんな彼の様子には私は自然と口元に笑みが零れた。

（ああ、私は修一くんに恋をしてしまったんだ――）

だからこんなにも苦しくて切ない。

なんて変わり身の早い女だろう。自分でもそう思ってしまうほど、私は待ち合わせをしていたはずの恋人なんてどうでもよくなっていたのだ。

だから私はズット震えていた携帯を鞆から取り出した。きっと今なら“さよなら”を平然と言えると思ったから――。

『もしもし千紗！？　やっと出たよお……！！』

もしも私と言うより早く甲高い女の声が飛び出してきた。

「――っ！？　か、香織？」

私は携帯を少し耳から離してその声の主、中学からの親友である香織に驚きを混じらせながら応えた。

『そうよ香織たんよ！　香織たんなのですよって、ところで千紗は今一人！？』

「う、うん」

香織の声に混じる剣幕に思わず私は頷いてしまった。

『それホントね？ ホントなのよね！？ よかったぁー！！ ホントによかったよう』

「か、香織！？ あのっ」

違うの、と言おうとして私はその後続いた香織の言葉に頭が真っ白になった。

『ごめんねっ！！ ごめんね、ごめんね、ごめんねっ！ 千紗の彼氏にキスしてたのあたしなのっ！』

「え……？」

『ゲームだったの。千紗を何時間で落とせるかって事で賭けてたの。あたし、頼まれてさ。まさかあいつの彼女が千紗だなんて知らなくて……。後で写真見て驚いて、千紗に電話しても中々出てくなくて……。それでね、あのねっ、千紗を落とす役の奴がいてそいつの名前が“葛城修一”って言うの。もし、そんな名前の奴が近づいてきたら絶対相手にしちゃダメだからねっ！！ ホントにごめんねっ！――！』

心の中が信じられないほど落ち着いているのが不思議だった。さつきまでは揺れて揺れて溢れそうだったのに、今は波一つたっていないのを私は感じていた。

「そんなに謝らないでよ。あれ香織だったの？ 全然気付かなかったわ。私ならへーき。実はね、香織だけじゃないの、あの人。節操無しでねえ……。そろそろ別れようって思ってたの。後、電話気付かなくてごめーんっ！ 私、今ゲーセンにいてさ」

『ああ、なんだよかったあ。あたしテキリ……。ごめ、何でもないや。にしてもさあ、千紗ってばけっとしてるのにゲームだけは強かったもんねえー』

「何よそれえー、もう。まあ、とにかく私はへーき。そろそろ帰ろうと思ってたところだし。また景品ガッポガッポで大変なの。香織にもあげるね」

『うん。……ごめんね』

「違うでしょ？」

『あはは。——ありがとう』

「うん。じゃあね」

その言葉を最後に私は通話を切った。

——千紗を落とす役の奴がいてそいつの名前が“葛城修一”って言うの——

私の頭には香織の言葉がずっと反響していた。

「千紗ー。ほら、今そこで取ってきたよ」

彼は腕に沢山の景品を抱えて笑っていた。
彼の名前はそう、“葛城修一”。

「——幾らだったの？」

「——え？」

「私を落とすと幾らもらえるの？」

彼の顔に浮かぶ困惑が許せなかった。

「全部聞いたわ。何もかも」

「……………え？——あつ！！——ち、違うんだっ！」

「何が違うって言うのよ!？」

涙が溢れそうだった。彼氏のキスシーンを見るよりも、ずっと、ずっと苦しかった。

「切っ掛けが欲しかったんだ、俺。千紗に話し掛ける切っ掛けが……。だから——ごめん！！騙すとかそんなつもりは——」

「そんなの信じられないっ！！何が悲しい思いをしたもの同士よっ、嘔吐きっ!！」

そう言って私は固まっている彼を置いてゲームセンターから飛ぶように駆け出した。

“嘔吐き”と言った時、彼は恐ろしく傷ついたような顔をした気がした。

それからどこをどう走ったかは覚えていないけれど、気が付けば家のベッドに倒れ込んでいた。涙はとうに乾いている。

着替えるのも億劫で、枕に顔を押し付けたまま適当に衣服を緩め――。

（……大丈夫。明日はいつもの私）

目蓋を落とせば世界は黒く塗り潰された。

留守電＋再生Ⅱ心変わり（前書き）

『しゅうちゃんのバカっ！！　ずっと、ずーっと一緒にいてくれる
ってゆったじゃないっ！！！』

『ごめんね、ごめんねっ！　でもぼく、絶対おつきくなってちーち
ゃん迎えにいくから、約束する』

『そんなの信じられないっ！！　しゅうちゃんのバカっ、嘔吐きっ
！！！！』

『それでも、ぼく、迎えにいくから。絶対——！！』

留守電+再生〃心変わり

ピピピッ、ピピピッ、ピッ……

鳴り出した携帯のアラームを手探りで止め、そのまま時間を確かめる。バックライトで照らされた画面には、六時を少し過ぎた時刻が映し出されていた。

電源ボタンを何度か押してスヌーズも解除する。再び毛布に包まろうとして、着替えもせず寝たのを思い出した。温もりが残る寝具たちの誘惑に大いに迷ったが、枕カバーに残るグロスの煌めきを見付けてしまい、私は仕方なくベットから起き上がった。

「……うう。せめて化粧は落としておくべきだったか……」

洗面所の鏡に映った自分に戦々恐々としながらお風呂の準備をする。溜まっていた洗濯物を回している間にシャワーを浴びた。

色々とサッパリとさせた私は、リビングで適当に買い置きしていた菓子パンを頬張る。

「んっ……むぐ……コレ、中タイケる」

時折、感想を零し、お茶で喉を潤しながら黙々とパンを口に運ぶ。そうして十分もしない内に菓子パンを平らげた私は、ゴミ箱の上で手に付いたパンくずを落とすと徐に立ち上がり——ベットの隅に放り出していた携帯が着信を告げるランプを点滅させている事に気が付いた。

一定の間隔でチカ、チカと光るランプの色は電話帳に登録がない事を示していて——。

メルマガか何かだろうと適当に当たりを付けて携帯を開いた私は、

待ち受けに表示されていた留守電と着信を知らせるアイコンに首を捻る。訝りながら開いた着信履歴には知らない番号。

（間違い電話かなあ……？ 普通はメールだよな？ 知らない番号だし……）

間違いで入れられてしまったメッセージを聞く事に少しだけ抵抗を感じながら、いつ履歴が残されたのかと日時を確認した瞬間、私は携帯を取り落としそうになった。

（……十二月二十四日……二十二時四十二分……まさか、ね……）

その身に覚えのあり過ぎる日時の羅列にゴクリと唾を飲み込んで携帯を操作する。後はボタンを押すだけのところまで来て、指がピタリと止まった。

（別に、聞く必要もないよね……）

もしも、本当に大切な要件なら、またかけ直してくるだろう——そんな風に私は自分に言い繕う。

……それが“逃げ”と言う事ぐらいわかっていた。これ以上、傷付きたくなくて、目を逸らして気付かないフリをしているだけだと。

（……でも、そうだとしたら、何がいけないの？ 傷付きたくないと思う事の何がいけないの？）

自己防衛したってバチは当たらないはずだ。だから、消してしまえばいい。そう、思うのに、指は一行に動かず……。それからどれ

くらい経ったのだろう。一分か二分か、はたまた数十分か。バックライトの消えた黒いディスプレイを見詰めたまま――。

……私は、何もできずにいた。

何度も何度もどうして迷うのか、どうして動けないのか、自問自答しても答えは見付からない。

もう、自分の気持ちすらわからず、私はギュッと目を閉じた。

（ああーもうっ！ 私は結局、どうしたいのよ!?!）

苛立つ衝動に駆られるまま、まだ生乾きの髪を掻き^か毟^{むし}る。一頻^{ひとしき}りそうして落ち着いた頃、あれだけ迷っていたのが嘘のように答えは出ていた。

（どうせ、何をしたって後悔するんだから、聞いてやろうじゃないの!）

勢いが衰えぬうちにメッセージを再生すべく、親指に触れるボタンを押しこんだ。

『……………もしもし、千紗？ 俺――葛城修一です』

耳にあてた携帯のスピーカーから流れ出した優しく甘い声にツキンと胸が痛む。思わず停止ボタンを押そうとするが、まるでそうする事を知っていたかのように続いた彼の『切らないで!』と言う必死な声が私の指を引き止めた。

『切らないで……………最後まで、聞いて欲しい』

息を吸う小さな音と間。

『……俺が今更何を言っても、言い訳にしかないのはわかってる……信じてもらえないのもわかってる。……千紗に、俺の言葉を聞く義務も義理もないって事も』

一息に紡がれた言葉の端々から伝わってくる後悔の色に私は戸惑う。

なぜ彼はこんなにも苦しそうなのだろうか——？

（それとも、賭けはまだ、続いていて、私の同情を引こうとしている？ でも——）

彼の声に滲む苦渋がそう思う事を許してくれない。
戸惑う私を置いて、メッセージは流れ続ける。

『でも、どうしても、伝えたくて……』

そしてまた、息を吸う小さな音と間が入る。

『俺は……俺は、千紗を騙したかったわけでも、傷付けたかったわけでもないんだ』

言い淀みながらも吐き出された言葉に「嘘つき……」と呟きを漏らしてみるも、彼に言い捨てた時ほどの力も勢いもない。

……不思議だった。それと同時に呆れもした。何度も騙されるなと、これは彼の演技なのだと言い聞かせているのに、彼の声を聞けば聞くほど騙されてもいい、彼を信じたいと思う自分に。

（……私って本当に、どうしようもないかも……）

そう——信じられない事に、私の心は揺れていた。

ふーっと漏らした溜め息と共に瞳も閉じれば、目蓋の裏には真剣な眼差しをした彼が居て――。

『都合のいい事を言っている自覚はある……これが自己満だった事も……って、ごめん。言い訳がしたかったわけじゃないんだ』

本当のところは何一つわからない。彼がどんな顔で、どんな思いでこのメッセージを吹き込んでいたのかなど、わかるはずもない。……だと言っのに、私は期待しているのだ。伝わってくる思いが真実なのだと。

（私はきつと、何か事情があったんだって……そう、思いたいんだ）

そこまで考えたところでもう一度溜め息を吐いた私は、閉じていた目蓋を押し上げた。視界に入ってきたのは見慣れた部屋の壁と、そこに掛けられた七時を指そうとする時計の針。携帯を押し当てている耳には未だ続く彼の声。

『……今日は、ありがとう。数時間だったけど、こんなに楽しかった事って今までになかったから……』

そして――どんどん大きくなっていく期待する気持ち。

焦れるような私を知ってか知らずか、言葉を止めた彼は、深呼吸でもしたように大きく息を吐き――。

『本当に、ありがとう』

疑問＋告白＝真実

「……………」

無音の携帯をしばらく耳にあてたまま、私は茫然と立ち竦む。

「……ズルいよ、修一くん」

ポツリと呟けば、カタコトと音を立てて私の心は転がっていくのがわかり、苦笑を零してしまう。

「私、馬鹿だから、あんな風に言われたら……」

昨日、脱ぎ捨てたままの状態で床に広がっていたコートを掴むと、戸締りもそこそこに、私は家を飛び出した。

白い息を吐き出しながら私は走る。数分で辿り着いた最寄り駅。

運よく停車していた電車に飛び込んだ。

目指す場所は決まっていた。そこに彼はいると。根拠はなかったけど、確信ならあった。

女の勘とでも言うべきか、出会った公園のベンチで空を仰ぐ彼を見付けた時は、思わず笑ってしまった。

そして、私はジャリジャリと音を立てる砂をブーツで蹴散^{けち}らして進む。人気^{ひとけ}のない朝、それだけ音を立てれば空を仰いでいた彼も顔を上から前に戻し——固まった。

目を見開いて「信じられない」といった表情で見上げる彼の視線を、ベンチから二、三步手前で止まった私が受け止める。

「……………」

「……………」

絡まった視線は外れる事なく、私は彼を、彼は私を見続ける。そうして私も彼も何も言わないまま数分が過ぎた。

……いつまでも続くような気がした沈黙も、驚きから立ち直った彼が零した声によって破られた。

「……ど、して」

掠れた声は聞き取り難くあったが、一言ぐらいならば唇の動きで読み取る事も容易かった。そして、そこに込められたであろう色んな思いも。

例えばそれは疑問であつたり、恐れであつたり、期待であつたり――。

困惑の抜け切らない彼が何だかおかしくて、私は少しだけ笑い目を閉じた。そして考える。……どうして彼に会おうと思ったのかを。

（どうしてかな？ どうしてだろう？）

彼との関係を最後にする事だつて多分できた。

なのに、それをしなかったのは、彼の全てを否定できるほど、私が彼を知らないから。

（……だからそう、知らなければいけない気がした）

その結果、傷が増える事となつても。知らない事で、いつの日か後悔してしまわないように、大切な事を見過ごしてしまわないように。

（何より、私が目で見て、肌で感じた真実と言えるもの――昨日の

数時間は、とても、幸せだった)

そうして出した答えに私は一人頷いて、再度、座る彼を見詰め問う。

「昨日は……私も楽しかった。それが嘘でもホントでも———だから、教えて」

……彼は言った。私を騙すつもりはないと、傷付けたかったわけでもない。

(なら、どうして——?)

揺れる瞳を覗き込むように見詰めれば、それを隠すように彼は俯き足元に視線を落す。

それから肩を震わせるほど大きく息を吐いた後、ポツリポツリと言葉を紡ぎ出した。

「ずっと切っ掛けが欲しかったんだ。千紗と話す切っ掛けが」

時折、こちらを伺うように挟まれる間に「うん」と小さく相槌を返し私は先を促す。

「千紗は……いつも杉山と笑ってて、俺がすぐ隣に座っても全然気付いてくれなくてさ」

告げられる内容は、とても衝撃的で、そんな時でも場合でもないのに、私は頬に朱を上らせてしまう。

俯く彼はそんな私に気付かないまま、話を続けていた。

「それでもいいと思ったんだ。大学で、たまに見かけるだけで十分だって」

一呼吸置いた彼は、膝の上にあった手のひらを握り込んだ。その際、穿くジーンズの一部も巻き込んだのか生地には皺ができる。

「それなのに、杉山がゲームを……千紗で遊ぶとか言いやがるから……！」

それから吐き捨てるように発せられた声は、紛れもない怒気を含んでいて——それを聞いていた私は、冷水を掛けられたようにサツと頬の熱が引いていくのを感じた。

「我慢できなくなつて、俺が奪つてやろうつて」

ぎゅっと布の擦れる音と共に、ジーンズに付けられた皺が更に深くなる。

「杉山を許せないと思っていたのに、いつの間にか浮かれてたんだ、俺」

握り込む手に、強い力を使っている所為か、はたまた別の理由か、彼は時たまその肩を震わせていた。

「ずっと千紗に話し掛けたくて、でもできなくて。それがやっと叶うんだって」

なのに——と重ねられた彼の声音に、私は胸を締め付けられる。気が付けば、右手でコートの胸元辺りを掻き集めるようにして握り締めていた。

「結局、千紗を傷付けて泣かせて、あの時と同じまま……」

（あの時——？）

彼の物言いに引つ掛かりを覚え内心首を傾げるも、理由はわからないまま。ただモヤモヤとした何かが胸の内に広がっていく。

（……なに、これ）

……私は何か、何か大切な事を忘れてはいないだろうか。

そんな、漠然とした焦燥感にドキドキと鼓動は早く、握り締める右手はじつとりと汗ばんだ。

「……約束をしたのに」

約束——その言葉に私の胸は、ドキリと一際大きく音を立てる。
ひときわ

「迎えに行くって」

『そんなの信じられないっ！！　しゅうちゃんのバカっ、嘔吐きっ
！……』

それは、一体、誰の言葉であっただろうか……。

「たとえ信じてもらえなくても、俺の独りよがりだったとしても……
……」

『そんなの信じられないっ！！　何が悲しい思いをしたもの同士よっ、嘔吐きっ！……』

（ああ……………）

あの時の彼の傷付いた顔によく似た誰かを私は知っている。

あれは、そう——悲しくて悲しくて、蓋をしてしまった幼い頃の記憶。

その中の誰かが『ちーちゃん』と、私を呼ぶ。

（ううん。私は、知ってる——あの声は——）

「しゅう、ちゃん」

思わず出してしまった声に、俯いていたはずの彼が、弾かれたように顔を上げた。

「千紗……………」

まるで、何かを期待する眼差しを向けられて——。

『ぼく、ゆうきしゅういちって言うんだ』

『あつ、俺は修一、葛城修一。こちらこそよろしく！』

記憶の中の幼い彼が、目の前の彼と重なった。

過去＋追憶Ⅱ腕の中

私は幼い頃に不慮の事故で両親を亡くし、また、色々な理由から親戚の間を盪回しにされてきた。

そうした中で大人たちの無理矢理に取り繕った上辺に触れた。同じ年頃の子が居れば、扱いの差による虐げを受けた。それでもそれらに縋らなければ生きていけない無力さに、何度打ちのめされた事か。

あの頃はいつも暗い顔をしていた気がする。

しかも、そう言った事に敏感な子供たちは、私を徹底的に排斥した。そんな私に友達ができるはずもなく、いつも一人だった。

彼と出会った日も、私は近所の土手にランドセルを抱え一人で座っていた。

（かえりたい……）

何度となく繰り返してきた言葉を、飽きる事もなくまた呟いて私はランドセルに顔を埋めた。目を閉じれば浮かんでくる幸せだった頃の記憶……父がいて、母がいる。狭くても、ボロくても、そこが私の帰る場所だった。

だけど??二度と帰れない。その事実が余計に恋しくさせた。

はぁーっとランドセルに息を吐きつけければ、赤い表面が一瞬だけ白く曇って、スツと元の色味に戻る。そんな意味のない行動を何度も何度も何度も……。

「なに、してるの？」

突然、掛けられた声に私は飛び上がらんばかりに驚いた。抱えて

いたランドセルを取り落としそうになりながら振り返れば、自分と同じ年頃ぐらいの男の子がサッカーボールを片手にこちらを覗き込んでいて??。

男の子の澄んだ瞳に映った自分の酷い顔に、居たたまれなくなつて私は視線を逸らした。

「……なにも、してない」

拒絶するように再びランドセルに顔を埋めれば、「ふん」といしながら隣に男の子が腰を下ろす気配がする。それから向けられる視線も。居心地が悪くなって顔を上げれば、その間もこっちを見やる男の子と視線がかち合う。

「ぼく、ゆつきしゅういちって言うんだ」

にこりと笑う男の子に私はどんな反応を返せばいいのかわからず、抱えるランドセルに力を込めたまま見返せば「きみは？」と問われた。

「……ちさ」

期待に満ちた瞳に促され小さく答えれば、彼はにこにこと頬を緩ませて言う。

「じゃあ、ちーちゃんだね！」

それが、私と彼??結城修一の出会いだった。

その日から私と彼は気付けばいつも一緒にいた。他の子供たちのように駆け回ったりするわけでもなく、ただ同じ空間を共有し、他

愛のない話をポツリポツリと交わす……それだけの事に私は救われた。

あの時は運も良かったのか、盥回しにされていた私にしては珍しく長い間その土地に留まる事がでたのも幸いした。

彼と過ごすうちに孤独を癒された私は、笑顔をも浮かべられるようになった。やはり、暗く沈んだ顔より笑顔の方が良かったのだろう。笑う事で、私を敬遠していた人たちとの距離も僅かではあったが縮まった。

??そうして少しずつ、少しずつ私を取り巻く環境は向上していった。

「ちーちゃんがさびしくて、さびしくて、たまらないって顔、してたから」

初めて私に手を差し伸べてくれた彼はそう言って笑う。いつもとは違う悲しげで、寂しげな笑みで。

「ぼくも、弟と会えなくなった時、とても悲しくて、さびしかったから」

彼の言う“会えない”が、私と同じなのだと気が付いて、衝動的に彼の手を握り締めた。

「わたしがいるよ、ずっと一緒に」

「……うん、ぼくもちーちゃんのそばにずっといる……ずっと一緒に」

私たちはそんな約束とも呼べない言葉を交わして。繋いだ指先が、伝わる温もりが消える事などないと根拠なく信じていた??。

「……引っ越す事になったんだ」

その瞬間までは。

……危つい均衡だったのだと、それが崩れた刹那に悟らされた。
どうしようもない事があると、知っているはずなのに、私は溢れてくる涙と言葉を止める事ができない。彼を責めても何にもならないのに、詰らずにはいられなくて。

「しゅうちゃんのバカっ！！　ずっと、ずーっと一緒にいてくれる
ってゆったじゃないっ！！」

「ごめんね、ごめんねっ！　でもぼく、絶対おつきくなってちーち
やん迎えに行くから、約束する」

もしかしたら、私の方だったかもしれないの؟؟そんな可能性
すら棚に上げて。

「そんなの信じられないっ！！　しゅうちゃんのバカっ、嘔吐きっ
！！」

「それでも、ぼく、迎えに行くから。絶対——！」

彼の声を背に受けながら私は駆け出した。

次の日から彼の姿を見る事なく、ほどなくして私も違う親戚に引き取られる事になり、多くの思い出が残る土地を後にした。それと同時に記憶に蓋をして。

「しゅうちゃん……なの……？」

一瞬に満たない追憶から帰ってきた私は、戸惑った声を上げてしまふ。そんな風に問いかけずとも、目の前の彼が“結城修一”以外なわけがないと、私は確信しているのに。

……その証拠に、心よりずっと深いその場所が歓喜に震えているのだから。

「……うん、迎えに来たんだ………ちーちゃんを」

泣きそくに歪んだ顔で彼は笑う。そうして恐る恐るといった風に伸ばされた腕の中に、私は迷わず飛び込んだ。

どうして彼を信じたかったのか、何か事情があつたのだと思いたかったのか、なぜ、こんなにも惹かれていたのか、それが今、やつとわかった。

「……遅い……遅過ぎ！」

彼の胸へ顔を埋めれば、腕は私の背に回り、離さないと言うようにきつく抱き締められる。

「だって、ちーちゃん、俺に全然気付いてくれないから??俺の事なんて、思い出したくもない記憶だったのかもって……」

「……違う! 違うよ……しゅうちゃんと離れて過ぐすんなんて考えられなくて……」

だから私は記憶に蓋をした。悲しみに囚われ過ぎては、笑顔を失_な

くしてしまうと思ったから。せつかく取り戻した笑顔を失くすような事になったら、彼と過ごした日々まで否定してしまうような気がして……………なんて都合良く自分を誤摩化した。

……彼を信じて待ち続ける勇気のなかった私は、そんな風に自身を欺いたのだ。

「…………信じられないなんて言って、嘔吐きだなんて言って、ごめんなさい…………」

そう告げた途端、更に強く彼の腕が背に食い込み、同時に左肩に加わる重みと耳元をくすぐる長く深い吐息。そして??。

「……………よかった」

小さな、小さな、眩きだったけれど、私は確かに彼の声を聞き取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7003z/>

聖夜の出会い

2011年12月25日23時13分発行